第２　教育研究団体の意見・評価

①　一般社団法人　情報処理学会

（代表者　森本 典繁　　会員数　約21,000人）
ＴＥＬ　03-3518-8374

１　前　　文

「令和７年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法等」において，『情報Ⅰ』については，試験時間 60 分配点 100 点で，「出題方法（出題範囲，出題科目選択の方法等)」は空欄であるので，選択問題はなく「情報Ⅰ」の学習指導要領の内容を総合した出題範囲で出題されることが示されている。また，「令和７年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」において，問題作成の基本的な考え方，構成・内容，分量・程度，表現・体裁や問題作成における配慮事項が示され，「情報Ⅰ」に関しては，「日常的な事象や社会的な事象などを情報とその結び付きとして捉え，情報と情報技術を活用した問題の発見・解決に向けて探究する活動の過程，及び情報社会と人との関わりを重視する」ことが明記されている。

これらの方針に従い，第１問～第４問（全問必答）として出題された。２では，設問ごとに，評価結果を述べる。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

試験問題の評価結果をそれぞれの設問ごとに述べる。

第１問　問１～問４までの４問で構成されており，問１は基本的な知識の把握を，問２～４は提示された状況説明から解を導き出す思考力を測る小問及び中問の集合である。全問，設問及び解答群を含めてそれぞれ２ページに収められていて適切な配置になっている。配点は問１に４点（採点項目２個），問２に６点（採点項目２個），問３に５点（採点項目２個），問４に５点（採点項目２個）となっている。概ね適切と考えられるが，問１の［ア］・［イ］と問４の［コ］－［サ］は難易度と配点が逆転した結果になった（後述）。

問１　a，b の小問２問構成であり，初歩的な知識の確認問題である。a は電子署名，b は IPv6 について問うており，いずれも情報技術の基本的な知識・理解についての適切な設問であると評価する。ただ［ア］・［イ］は正答率が 0.5380, 0.4184 であり，第１問の中では最も低い二つとなった。用語を選ぶのでなく用語を示して機能や目的を問う形式であることと，表層的な理解では正答できない内容だったためと思われる。

問２　７セグメントＬＥＤについて説明し，７つのＬＥＤの点灯・消灯の組み合わせの数と，ＬＥＤ部品を複数桁使って指定されたフォーマットで表現できる値（コード）の数について問うている。しかし［カ］は７セグメントＬＥＤの性質が反映されない（桁ごとに最大値が異なる表示器として扱えばよい）問いとなっている。

問３　チェックディジットを題材にとった問題である。［キ］は具体的な値を提示して実際にチェックディジットの値を求めさせることで，計算方式の理解を確認する。［ク］は二つの計算方式の違いから生み出される機能的な差について考えさせる。ともに概念的な理解を正しい説明文から選ぶような形とせず，読解力や思考力を問う問題にまとめている。なお何らかのウェイト付きチェックディジットを学んだ受験者は（特に［ク］を）より速く解ける可能性があるが，知らなくとも問題文を読んで解答することは十分に可能と考える。

問４　a , b の小問２問構成であり, どちらもフィッツの法則を下敷きにした UI 設計の問題である。ただ a , b ともに説明量が多い割に，それらの読解を経ずとも，「最も短い時間で指し示すことができるのは」といった最後の問いかけだけを読み，マウスでのボタンやメニューの操作経験から正解を選べる可能性が高いと想像する。たとえば コ－サ の正答率は 0.9502 と非常に高い。たとえば a ではマウスカーソルの初期位置を②より①に近づけておくことで「ディスプレイの端にある対象物は大きさが無限大となる」という設定を正しく適用しないと（直感では）正答できなくする対策が考えられる。「対象物が無限大でも移動時間はゼロにはならない」といった反論については，b にもある「この法則のみに沿って設計されたとすると」といった但し書きを加えることができるだろう。いずれにしても情報デザインの問題は用語などの知識問題になりがちなところを，本問は設計（デザイン）の対象をモデル化し，法則に従って考えさせるタイプの「情報デザイン」問題となっており，その点は評価する。

第２問　第２問は A と B の二部構成で，合わせて 30 点の配点となっている。A はスーパーマーケットのレシート情報やポイントカードを中心に，本部や店舗，メーカー，配送センターとの連携を扱い, B は集金時に千円札がおつりとして不足するかどうかを乱数を使ってシミュレーションする問題である。学習指導要領の「情報通信ネットワークとデータの活用」や「モデル化とシミュレーション」の内容に対応しており，いずれも範囲外の要素は見当たらない。

A は問１～問４で構成される。問１ ア , イ－ウ と問２ エ はレシートに含まれる項目と会員情報を組み合わせて何が分かるかを判定させる問題で, 多くの受験者が正答したようである。問３ オ－カ では本部や店舗，配送センターなどがやり取りする情報を図を参照して振り分けるが，このあたりで若干正答率が落ちており，複数経路や店コード，会員 ID などを並行して考えなければならない点が難しかったと推測される。問４ キ , ク , ケ はネットショッピングサイトとの連携についてのメリットと前提条件を対応付ける形式で，とりわけ ケ は複数の要素を同時に整理する必要があって難度が高めであった。ただ, 問題文や図表が丁寧であり，店舗や本部，ネットショップ間の情報の流れを理解できれば解答可能な設定になっている。

B では問１～問３を通じて, 一万円札または千円札６枚で支払う人が順番に来る状況をモデル化する。問１ コ , サ シ , ス セ は支払い手順ごとに手元の千円札が不足するかどうかを思考させる内容で，冒頭の小問 コ や サ シ では正答が多かったが，不足枚数の算定が絡む ス セ でやや苦戦したようであった。問２ ソ は 1 万回試行した結果を棒グラフで示し，多数回試行の分布を読み取る出題である。単一の試行だけでは不確実性が大きいことを理解させる意義があると評価できる。問３ タ は千円札を 20 枚準備した場合に起こりえない支払いパターンを選ぶ問題で，論理的な検討が必要だった。ここでも最終的に「何枚用意すればよいか」までは問われず, シミュレーションの途中段階で終わる印象はあるが，高校生が確率的モデルに触れる問題としては十分に意味がある。

配点や形式としては，小問が２点または３点ずつ割り振られていて平均得点も高めであり，多くの受験者が基本的部分を取りこぼさず得点できた問題だったと推測される。単に知識を問うだけでなく，複数の項目をどのように組み合わせるか，あるいは乱数と順番によって不足が生じるかを段階的に思考する力を要する点は共通テストの趣旨に合致している。シミュレーションに不要な一万円札の管理や，ネット連携での複数条件対応など，若干煩雑に感じる部分もあるが，受験者の思考を促すためにあえて残した可能性もある。全般に見ると，A での流通システムや B での確率モデルといった題材が高校「情報Ⅰ」の枠内で適切に配置され，出題意図も十分達成されていると言える。

第３問　部活動での作業役割の分担割当を題材としている。割当処理や割当結果の表示の自動化を

プログラムを用いて実現することを通じて，学習指導要領の「コンピュータとプログラミング」におけるコンピュータを活用した問題解決能力を測る問題である。

問１で,プログラムを活用する前の状況での分担割当に使用している表や図と割当方針を示し,問２で割当処理を行うプログラムを扱い，問３では，問２のプログラムを活用して割当結果を表示するプログラムを扱っている。このように，現実活動の理解から始まり，一部処理の自動化を経て，実現したプログラムを活用して別の処理に発展しており，受験者が無理なく取り組める構成である。

試験問題の形式はどの問も図表・方針の理解やプログラムの変数・式や文の実行回数を問う穴埋めであり，適切である。

問３では，問２のプログラムを繰り返すことで二重の入れ子を扱っており，また，配列の利用法に対する十分な理解が要であり，問題の程度としては適切である。

以下，問いごとに意見を述べる。

問１　プログラムを用いて問題解決する対象となる現実活動を図表や記述から適切に理解できるかを問うている。前半では記述や表や図を正しく関連させて理解しているかを，後半では処理方針を理解しているかを問うている。プログラムを用いて問題解決する前に，対象となる現実活動を適切に理解することは重要であるし，問２・問３の解答にも必要なことであるので，このような構成は適切であるが，配点は検討の余地がある（後述）。

問２　問１で理解した処理方針に基づき，個々の割当を行うプログラムを扱う。前半で扱うプログラムで用いる配列の使い方を説明し，その理解を問うている。中盤では，処理の実装手順を説明せず条件式の部分が設問となっているプログラムを示し，適切に動作するように条件式を解答させることで，プログラムを読む力を問うている。後半では，処理対象データを変更し実行した場合の繰り返し中の条件分岐中の文の実行回数を解答させることで，プログラムを適切にトレース（追跡）できるかを問うている。正答率は２割程度と低かったが，トレースは基本的な能力であり，設問として適切であったと考える。

問３　問２で作成した個々の割当を行うプログラム（処理）を繰り返すことで，全ての割当を行うプログラムを扱う。このプログラムで用いる変数や配列の役割や処理の概要の説明を理解し，プログラムを完成させる。［ケ］［コ］では，外側の繰り返しを適切に制御できるかを，変数と繰り返す範囲を解答させることで問うている。［サ］と［シ］では，処理を実現するために適切に配列を扱えるかを問うている。いずれも，分量・程度ともに適切である。

配点については，問１～問２の最初の設問までの問題設定の理解を促す部分で 25 点中 10 点が配点されており，それ以降の問題解決部分にもう少し配点してもよかった。あるいは，問１にプログラムに関する設問を設けるなど出題を工夫することで，問題解決に関する設問を増やすことも考えられる。

第４問　問１～問４までの４問で構成されており，どの問題も基本的に表（データ）からグラフを作成し，そこから情報を読み取る問題である。学習指導要領の（4）「情報通信ネットワークとデータの活用」のア（ウ）「データを表現，蓄積するための表し方と，データを収集，整理，分析する方法について理解し技能を身に付けること。」，イ（ウ）「データの収集，整理，分析及び結果の表現の方法を適切に選択し，実行し，評価し改善すること。」に対応する問題である。問１～問４の順に分析が少しずつ高度になっており，難易度が増していく構成となっている。

以下，問ごとに意見を述べる。

問１　前半は生徒と先生の会話形式になっているが，あまり長い会話ではなく，適切な量に止められている。また，知識問題となりがちな尺度水準を問う問題としては，実践の中で知識が

活用できるかを問うており，好感が持てる。しかし，［ア］・［イ］の正答率は 0.2879 と低く，実践の中での活用が難しいことが浮き彫りになっている。ただし，U さんの「郵便番号などと同じで」という発言は，郵便番号の仕組みを一定程度理解していない受験者には有用ではない可能性がある。一方で，地方の尺度水準を確認した後に「番号と地方以外の項目については…」となっており，番号が無視されている点が気になる。表１から番号の列をあらかじめ削除しておいてもよかったのではないか。後半については，棒グラフ・100%積み上げ棒グラフの読み取り技能を問う標準的な問題である。

問２　散布図と相関係数から情報を読み取る問題である。散布図から情報を読み取る問題としては，正答率も 0.6170 と標準的な難易度である。ただ，問題文には「これらの散布図と相関係数のみから読み取れること」とあるが，解答群はいずれも散布図から読み取れる内容であり，相関係数をより活用する設問や選択肢があってもよかったのではないか。

問３　新たな指標を導入し，データ分析を行う問題である。［キ］はそれぞれの軸を同じ数で割ったものであることが理解できているかを問うており，正答率は低かったものの思考力を問う良問である。一方，問題文に「U さんは，人口が多い都道府県には旅行の目的地になる場所が多く，…と考え」とあるが，この仮説は検証されていない。U さんの考えを活用できる問題があれば，なおよい。

問４　問３の続きとして，軸に箱ひげ図を入れ，四分位点や外れ値に関する知識と技能を問う問題である。前半は素直な問題になっており，受験者も問題なく解答できるものと思われる。一方，後半は「なぜそのような状況になっているのかに興味をもった。」と前振りがされているにもかかわらず，その回答を得ることなく問題が終わってしまっている。

今回の出題は指導要領の範囲で十分に解ける内容になっており，また思考力を問う問題も適切に織り交ぜられていた。難易度についても約９割が正答できる問題から，正答率２割程度の問題まであった。来年以降も同様の傾向となることを期待する。

３　総評・まとめ

『情報Ⅰ』の受験者は 279,718 人（他に『旧情報』を 22,171 人が受験）で，69.26 点であった。正答率が８割以上の設問の配点合計は 33 点（９割以上は 20 点）で，段階表示換算表の１段階は 1～38 であった。これらのことから，正答率が高い設問への配点が大きかったと判断できるが，『情報Ⅰ』初年度の出題としては妥当と考える。しかし，正答率が８割以上の設問については，今後段階的に是正されることを期待する。なお，「情報Ⅰ」の幅広い領域から，「社会や身近な生活の中の題材，及び受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象について，情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力を問う問題」や「問題の発見・解決に向けて考察する力を問う問題」が出題されており，適切であったと言える。『情報Ⅰ』の出題教科・科目の問題作成の方針は，事前に公表された「令和７年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テストの出題教科・科目の問題作成方針に関する検討の方向性について」「『情報』の問題作成方針に関する検討の方向性」を踏襲したものである。問題作成方針に関する検討の方向性が公表された際，試作問題も公表されていたが，本試験の大問構成や分量は試作問題と概ね同じで，受験者が戸惑うことはなく，最初の『情報Ⅰ』の出題としては妥当であったと言える。問題中のプログラム表記を，特定のプログラミング言語ではなく受験者が初見でも理解できる共通テスト用プログラム表記が用いられており，授業で学んだプログラミング言語による有利不利が出ないように配慮されている。

共通テストの出題形式・解答形式の制約の中，情報と情報技術を活用した問題の発見・解決に向けて探究する活動や情報社会と人との関わりにしっかりと取り組んだ受験者の思考，判断，表現す

る力を問う作問に奮闘している問題作成関係者に敬意を表す。

４　今後の共通テストへの要望

「情報Ⅰ」では,「情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ，情報技術を活用して問題の発見・解決を行う学習活動を通して，問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用し，情報社会に主体的に参画するための資質・能力」を育成することを目標としている。各領域で，情報と情報技術を活用して問題を発見しその解決に向けての過程を繰り返すことが期待されている。授業の中でしっかりとした実践に取り組むことで身に付く「情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力」や「問題の発見・解決に向けて考察する力」を測る出題となっている。今後もこのような問題を作成していくことを，強く期待している。

②　日本情報科教育学会

（代表者　森本　康彦　　会員数　約350人）
ＴＥＬ　049-266-4516

１　前　　文

今年度の共通テストより，新たな教科として「情報」が追加され，科目として『情報Ⅰ』が導入された。教科が追加されるのは，共通一次試験・センター試験・共通テストの歴史の中で初めてであり，歴史的な出来事と言えよう。本学会においては，学会が設立されて以来の念願がついに叶ったと言っても過言ではない。

共通テストでは，各教科・科目の特質に応じた学習過程を重視し，受験者が高等学校で身に付けた知識・技能のみならず，思考力・判断力・表現力等を評価するものとされている。大学入試センターの『情報Ⅰ』の問題作成方針では，「社会や身近な生活の中の題材，及び受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象について，情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力を問う問題などとともに，問題の発見・解決に向けて考察する力を問う問題も含めて検討する」とした。そのような中，『情報Ⅰ』のテストでどのような問題が出題されるかが，教育界だけでなく全国の注目の的となっていた。

受験者数は 279,718 人で，文系・理系に関係なく非常に多くの人が受験し，平均点は，69.26 点であった。他の科目と比べれば総じて平均点は高めであったが，前例のない初めての実施となることから，受験者の間には不安が広がっていただろう。しかし，やや平均点を高めに設定した作問のおかげで，多くの受験者が安心して自身の力を発揮し解答できたと思われる。問題は，社会や身近な生活の中の題材を用い，ただ知識を問うのではなく，問題文から場面を読み解き，適切に思考・判断する過程を通じ問題解決を図るための力を問うものであった。これは，大学入試センターが事前に示していた問題作成方針どおりと言ってよいだろう。

以上のことを踏まえ，ここでは，次の観点から総合的に評価を行った。

⑴ 出題内容や範囲は偏ったものになっていないか。
⑵ 問題の構成（設問数，配点等）や難易度は適切か。
⑶ 問題の設問形式は適切であったか。また，文章の表現や用語，図表などは適切であったか。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

出題範囲は，４つの学習内容のうち「コンピュータとプログラミング」「情報通信ネットワークとデータの活用」の内容が少し多い印象はあるが，全体のバランスを考えた問題構成になっている。

第１問　問１は基本的な知識を問う問題，問２～４は，知識を活用し思考・判断する問題が出題されており，適切な問題数や配点が設定されている。いずれの問題も見開きの各２ページで構成され，受験者が解きやすい配慮がなされており全体として表現・形式ともに適切である。

問１　a と b の小問の２問構成である。a はデジタル署名に関する基本的な知識を問う問題であり，知っていれば容易に解くことができる。b は IP アドレスに関する基本的な知識を問う問題で，難解な用語や言い回しを用いることなくその意味を問う良問である。いずれの問題も，受験者が短時間で解くことができ，分量・程度ともに適切である。

問２　７セグメント LED を題材とした問題である。前半はビット数から区別できる情報の種類の数を計算できれば正解できる平易な問題であり，後半は場合の数と組み合わせた問題で，図３でアルファベットの大文字小文字の区別も含め丁寧に説明されており，比較的容易に解

ける問題であると考えられる。前半後半ともに分量・程度ともに適切である。

問３　チェックディジットを題材とした問題である。チェックディジット自体は多くの教科書には記載されていない用語であるが，書籍の ISBN を例に詳しく説明がなされており［キ］については容易に正解を導ける。後半の［ク］については，解答群の選択肢ごとに例にならって仮の利用者 ID を用意しシミュレートすることで正解が得られることを考えると，思考力を測る良問と言える。前半・後半ともに分量・程度はともに適切である。

問４　ユーザインターフェイスに関する問題である。前半の［ケ］は「無限大」の意味の理解を含め，受験者が初めて意識させられる考え方ではないだろうか。とても身近で誰もが経験したことがあることを問うている良問であるが，逆に常識の中で解けてしまう易しいものになってしまったと考えられる。分量に関しては適切である。

第２問　ＡとＢで構成されており，いずれも社会や身近な生活の中の題材を用い，日常的な事象や社会的な事象と情報との結び付きや関係性，情報を活用した問題解決の過程を重視した問題である。全体として問題数，配点，表現・形式ともに適切である。

Ａ　レシートを題材として情報システムや情報の流れを考えさせる問題である。身近なものから考えさせ，情報科の目標にある「情報や情報技術を用いた問題解決」や，学習指導要領に示されている情報通信ネットワーク上の「データの流れ」を問題としている良問である。

問１　情報分析に関する項目をレシートから抽出させる問題であり，レシートの内容が理解できれば容易に解ける問題であるが，導入としては，分量・程度・選択肢ともに適切である。

問２　ポイント会員情報の登録内容とレシートから得られない情報を選択する問題である。常識として選択肢から正解が簡単に分かってしまう平易な問題である。

問３　情報システムにおける情報の流れと商品の流れの図から，店コードやポイント会員 ID がどの場面で必要とされるかを選択する問題である。身近な題材であり，実際の購入場面を想定しながらの思考力が要求され，程度・形式ともに適切な良問である。

問４　実店舗とネット上の店舗とのデータが連携することによるメリットを基に，その条件を選択させる問題である。問３と同じく実際の場面を想定しながら思考する必要がある。程度・形式ともに適切な良問である。

Ｂ　会計係が扱うおつりのシミュレーションの問題であり，身近でとても実践的な問題と言える。確率を変える展開もあるが，回数を増やす方向でも適切である。

問１　１回のシミュレーション結果の表を埋めていく問題であり，丁寧に計算すれば解くことができる。導入としては適切である。

問２　10,000 回のシミュレーションから得られた表を基に，それぞれの選択肢が示す意味を考えさせる良問である。選択肢も工夫されているが，明らかに誤りと分かるものもあるため，選択肢の数を減らし正しいものを全て選ぶようにするなどの一層の工夫が望まれる。

問３　実際に用意された枚数を基に，選択肢から起こりえないケースを判断させる良問である。それぞれの選択肢ごとに考える必要があるが，①は問２のグラフや常識からすぐに分かるため，選択肢に工夫の余地があるように思われる。

第３問　工芸品の製作割り当て作業を題材にした問題である。受験者が初見でも理解できる大学入試センター独自の日本語でのプログラム表記を用いており，受験者の混乱はなかったと思われる。プログラミングに関わる内容を問う問題として，適切な問題数や配点が設定されており，全体として表現・形式ともに適切である。問題文の図や変数名も分かりやすく整理されており，情報Ⅰで育成された思考力・判断力・表現力等を測ることができる良問である。

問１　工芸品４と５の担当者と製作期間を図や表から読み取る問題であり，工芸品の製作日数

や担当部員を図１・図２で確認できれば容易に解けるが，導入としては，分量・程度ともに適切である。

問２　「最も早く空きになる部員を選ぶ」ためのアルゴリズム（配列 Akibi）に関する問題であり，序盤の［カ］は容易に解答できると思われる。しかし，［キ］の条件式，［ク］の代入回数を求めるには，日常的にプログラムの処理のステップを追うことに慣れていることが求められるため，やや難しい問題と考えられる。

問３　工芸品数（kougeihinsu）と製作日数（配列 Nissu）を基に一覧表示を自動化するプログラムに関する問題であるが，受験者は配列 Nissu の値をどう用いるのかを理解できるかで正誤が分かれたと推測される。一方，［ケ］と［コ］について日数の扱いを誤ると答えに到達できない仕組みになっており，後半は取りこぼしが増えたと思われる。プログラミングによる思考力・判断力・表現力等を問う問題としては，分量・程度ともに適切である。

第４問　観光庁のデータを探究的に分析する問題である。尺度水準について問う問題，棒グラフ・帯グラフ・相関係数・散布図・箱ひげ図を読み取る問題により，多面的にデータの活用について問う形式となっている。また，実人数を基に散布図を描くだけでなく，都道府県の人口規模による旅行者数の比較とならないように，旅行者数を人口で割る変換により新しい指標を作り比較する分析手法が出題されるなど，思考力・判断力・表現力等を多面的に測ろうとする工夫がなされており，内容・範囲ともに適切である。各問は見開き２ページで構成されており，文章や図が見やすく配置され，解答しやすい配慮がなされていた。ただし，別紙による２箇所の訂正があったことは受験者の負担になったと考えられる。

問１　尺度水準を問う問題と，棒グラフと帯グラフから旅行者数やその割合を読み取る問題から構成されている。棒グラフや帯グラフについては小学校段階で学習する。グラフから意味を読み取ることは必要な素養ではあるが，共通テストとして平易すぎるように思われる。

問２　複数の散布図と相関係数から読み取れるものを選択する問題である。①の「すべての都道府県で，出張等の旅行者数は帰省等の旅行者数の 1.5 倍を下回る」のように項目間の比を考える問題では直線の傾きに着目する必要があり，数学科と情報科が連携して「データの活用」に取り組むことを示唆するものである。分量・程度ともに適切である。

問３　人口規模を考慮して単位人数あたりの旅行者数である「出張/人口」,「観光/人口」を新たな指標として利用した問題である。授業で都道府県ごとに集計されたデータを利用して分析した経験がある受験者にとっては，慣れている分析手法であったと思われる。その一方で，実人数による散布図と単位人口当たりの人数による散布図において，各点の位置がどのように変換されるか対応付けて読み取る経験は少ないと思われる。数学的な理由も考える必要がある教科横断的な問題であった。分量・程度ともに適切である。

問４　［ケ］は，倍率に関する問題であるが，問２とは異なり，x 軸方向の座標に着目して解答するものであった。単なる機械的な当てはめで解答するのではなく，グラフでどのように示されているかを考える必要があり，工夫された良問である。［コ］・［サ］は各軸の第３四分位数を基準に分割された領域を読み取る問題であった。基準となる値を決めて領域に分ける分析手法は，高校の授業においても活用してほしいと考える。［シ］は，散布図上の各点と原点との傾きが最小となっている点を選択することで解答できる。分量・程度ともに適切である。

３　総評・まとめ

初年度としては最適な問題の分量・程度だったと判断することができる。前文で述べたとおり，ただ知識を問うだけでなく，問題文から場面を読み解き，必要な知識を活用し，適切に思考・判断

して問題解決を図るための力を問う問題が多数見られた。

第１問の問１は，いわゆる知識問題ではあるが，b では用語（この場合は「IPv6」）を解答させるのではなく，「近年，128 ビットで構成される IP アドレスが利用されるようになった」という IP アドレスが拡張された事実を挙げることで，IP アドレスの役割を理解しているかどうかを測ろうとしている。これは，単なる用語の暗記では太刀打ちできない。知識を問う問題の出題方法として，これからも参考になる良問である。問３は，普段からこのようなシミュレート等で問題を解決する経験が乏しい場合は正答率が下がると思われる。この点を考えると，基本的な問題ではあるが，思考力を発揮し問題解決の力を測ることができる良問である。

第２問のＡは，「職業体験」よりも「探究学習」という設定の方が，会話文の内容との整合性がとれて現実的であると思われる。問４では，メリットの内容や条件の文の詳細部分がやや分かりにくいように感じる部分があり，明確な表現方法が望まれる。

第２問のＢは，問２と問３の順序を入れ替えた方が，問題解決の流れとしてはスムーズに思われる。問２，問３は，選択肢に明らかに誤りと分かるもの，グラフや常識からすぐに分かるものも含まれるため，選択肢の数を減らし正しいものを全て選ぶようにするなど工夫の余地があるように思われる。

第３問は，問２では，問題文がアルゴリズムの流れを十分に説明してはいるものの，部員数を増やす想定や最小値判定の「更新」の回数を理解させる過程が少々煩雑であり，受験者にはやや高い負荷をかけていたと思われる。もう少し段階的にアルゴリズムを提示するか，あるいは配列 Akibi の具体例を増やすなどの工夫があれば，混乱が減った可能性もある。全体としては，問１と問２の前半に非常に易しい小問を配置して受験者をスムーズに引き込みながら，問２後半から問３でプログラムへの理解度を厳しく試すことで，差がつく構成になっている。その分，後半の問題ではループや配列操作，日数計算などを同時に把握する必要があり，やや複雑すぎると感じた受験者も多くいたと思われる。また，前の問題の正誤が後の問題に強く影響を与える問題構成になっており，取りこぼす生徒を減らすという観点からは，工夫の余地があるように思われる。

第４問は，問１では，尺度水準の知識を問うだけにとどまっており，尺度水準の違いにより分析手法がどのように異なってくるのかについても考えさせられると，知識を基に思考する問題にできるのではないだろうか。問２では，複数の散布図を共通する項目が並ぶように配置し，散布図行列と同等のグラフとして作成されていた。教科書における散布図行列の掲載が見られないため本試験での出題を見送ったと考えられる。その一方，散布図行列は試作問題で事前に示しており，追試験でも出題していることから，丁寧な説明を記述したうえで出題すれば受験者は対応可能であると考えられる。全体としては数学的な知識を基に考える問題が多くなっているように見え，情報のもつ価値を評価したり，得られた情報から判断したりするような問題により PPDAC サイクルとして探究を行うことを目指す工夫がなされるとよいのではないかと思われる。

４　今後の共通テストへの要望

「情報」という教科は，2003 年度（平成 15 年度）からスタートした。本学会はそれにあわせ，準備期間を経て 2007 年に設立された。それ以来，本学会をはじめ，情報科に関わってきた全ての人たちが長年にわたり提唱してきた「情報」の大学入試への導入がついに実現した。今や，「情報」という教科で身に付ける資質・能力は，高等学校の全ての科目の学びを支える欠くことができない資質・能力である。共通テストへの『情報Ⅰ』の追加は，これからの未来を生きる若者達が必要とする基礎的・基盤的な資質・能力を，文系・理系を問わず，全ての生徒が確実に身に付けていくための大きな第一歩と考えられる。そのため，本学会としては，全ての生徒が受験することを前提に，

国公立大学志願者だけでなく，共通テストを利用して私立大学を志願する受験者もより選択しやすいように，試験の実施時間の順序を変更する等の見直しをお願いしたい。

共通テスト『情報Ⅰ』の初年度の試験では，社会や身近な生活を題材とし，学習過程を重視した問題が出題されたことで，思考力・判断力・表現力等を適切に評価する形式となっていた。同時に，情報を活用する力を試す試験として設計されていたことも，今後の高等学校教育にとって意義深い。前例がない中で，今回のテストにおいて良問を作成していくことは，大変な難しさがあったと思われる。作問に関わった全ての人たちに，感謝を申し上げたい。また，今後も，大学入試センターには，引き続きこの方針を維持し，生徒が実社会で情報を活用できる力を問う問題の作成をお願いしたい。